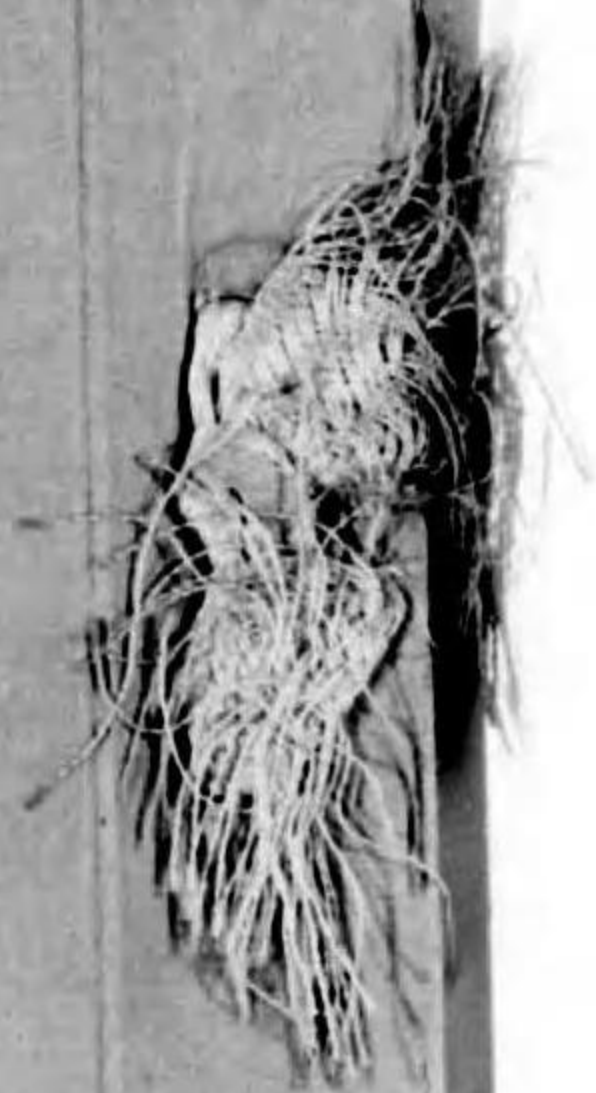
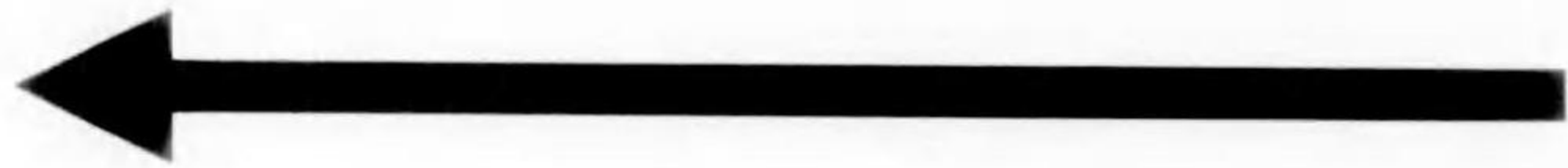


E026
0-94
2(2)

寧樂古經選



始



寧樂古經選



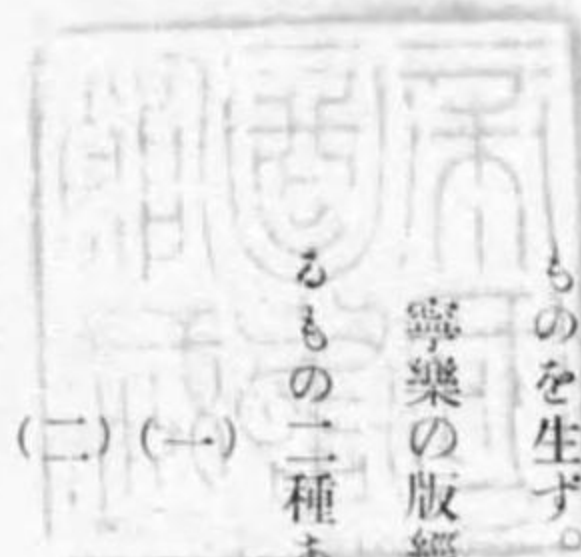
2001
010
314

寧樂の版經

一 奈良佛教と摺經

經典を書寫して、冥福を祈るは、既に支那の上代に初り、我が寧樂朝に於て極盛に達せり。世に之を天平寫經といふ。寫經に就ては、別項に述ぶる通りなるが、之と動機を同じうして、一時に多量の製作を希求する結果、此に開版の事業起り、木板に經文を彫刻し之を模板墨搨して、紙上に印出したるものを生ず。之を摺經又は版經と稱す。もと寫經に對する稱なる可し。

寧樂の版經は遠く寧樂朝に起り、近く徳川時代に及べり。而して、寧樂朝に於ける開版の文献に遺れるもの二種あり。



(一) 天平勝寶二年大伴赤磨懺悔文
(二) 神護景雲四年無垢淨光陀羅尼種四

前者は赤磨歿後、遺族同僚等の開版する所と傳ふれども、遺品の微す可きなく、後者は惠美押勝の亂平ぐの後、孝謙天皇の御願に依りて、百萬小塔の中に納め、十大寺に配置せられ、現に法隆寺に存し、世界最古の印刷物として、人の周知するところなり。

二 平安朝の開版

平安朝に至り、天台・眞言の二宗興り、傳教版、義眞點など稱する版經ありと稱すれども、確證の微す可きものなし。中期以後、法會に當りて、法華・觀普賢・無量義・仁王・藥師・阿彌陀・心經などの經典の

開版ありしことは、本朝文粹・續文粹等に載する題文に見ゆ、京都に於て夙に開版の行はれしを知る。其他、大日・教王・壽命經等密部の經典も開版せられたりき。されど、歲月悠久にして、多くは傳はらず現存するものとしては、左の數種に過ぎず。

- (一) 佛說六字神咒王經 一卷 卷子本 石山寺藏
天喜元年の朱書、保安元年の墨書あり。
- (二) 妙法蓮華經 卷第二 一卷 卷子本 皎亭文庫藏
承暦四年の墨書あり。
- (三) 大孔雀明王經 卷下 一卷 卷子本 久原文庫藏
寛治五年、保安三年の墨書あり。
- (四) 法華玄義釋籤 三、四、五 三帖 粘葉本 禪林寺藏
久安四年六月 日、撰願主僧良譽決定往生阿彌陀佛の刊記あり。

而して、寧樂に於ては、寛治二年、唯識論十卷の開版を以て初めとす。

三 春日版

藤原氏の勃興と共に、氏寺たる興福寺の興隆と爲り、氏神たる春日明神（就中第三殿の天兒原根命は藤原氏の祖神なり）の信仰起り、明神が興福寺の鎮守たる因縁よりして、此神明は唯識擁護の爲に、慈悲萬行菩薩として、春日山に垂跡せられたる權現なりとの信仰を生じ、靈驗のかずくは春日權現靈驗記に集められ、春日曼荼羅の表現と爲り、平安末より鎌倉時代にかけて、信仰愈高まりぬ。此に於て、唯識論并に三箇の疏（述記、了義燈、演秘）

を始めとして、法相宗關係の經論、列祖の撰述を中心とし、降りては、五部の大乘經、大般若經などの開版あるに至りぬ。其趣意は「春日の神恩を奉謝し、唯識の弘通を助くる」にあり。之を春日版といふ。而して、刊記に於て、其意を表現せる文字を列ぬるもあり。列ねざるもありて、形式一ならずとも、書風、描墨、裝潢に共通の様式ありて、他の寧樂諸大寺の開版と區別せらる。

平安朝に於ける寧樂の開版は、既に發見せられたるものに就て論ずる時は、悉く春日版に屬するもののみなり。而も唯識論・同述記・同了義燈并に法華攝釋・法苑義林章の五種に過ぎず。而して、何れも零本にして、一として完本の存するものなし。即ち唯識論は正倉院聖語藏に八卷ありて、第十に寛治二年の刊記あり。九行の刊記ありて、中に「唯識論一部十卷撰竟。治二年四月廿六日畢。校工僧觀増」の句あり。同述記は興福寺七末、十末、七本等ありて、康治元年、保元二年等の朱書あり。法隆寺卷三三年の墨書あり。高野山正智院九本、保元二年の墨書あり。日光天海藏卷二、養和二年の墨書あり。同了義燈は高野山正智院第一、承久四年の墨書あり。大谷大學第四、保延四年の朱書あり。等に、法華攝釋は東大寺一、二、三、四、安元三年の朱書あり。に、義林章は法隆寺一末、二末、二末六年の朱書あり。藥師寺一、二、五、七、嘉應三年の朱書あり。にあり。述記以下は何れも刊記なく、朱書又は墨書に依りて、紀年以前の開版なるを知るのみにて、開版の歴史は之を知るに由なく、同一の書に就て數回の開版ありしか、唯一回なりしかも明に知る能はざれど、諸本を比較するに、恐らく數回の開版はなかりしもの、如し。一般に通ずる特色は料紙と描墨の薄きこと、書風の堅くして小なること等は鎌倉時代の春日版に比して明に認むることを得。之を熾燦より出でし感通九年開版の金剛經と比較するに、刻法と書風に一脉相通するものあり。宋代には蜀版一切經開寶版の本行集經を見よ。の東大寺倉然に依りて請來せらるゝあり。高麗義天の開版せる續藏經東大寺藏華嚴演義鈔を見よ。の渡來するあり。此等は春日版に影響を與へしものなる可く、印刷文化の上よりいふ時は、未だ發達せず、創始期に屬するを察す可く、鎌倉時代に至り發達の頂上に達せるを知る

好個の資料なり。

四 鎌倉及び南北朝の開版

治承四年重衡の南都を火くや、東大・興福の大伽藍炎上し、典籍塵土に歸しぬ。然れども、源賴朝の外護に依りて、復興の氣運大に動き、寧樂の佛教復興の觀あり。即ち法相に貞慶上人あり。華嚴に圓照宗性・凝然あり。三論に澄禪あり。律に覺盛・叔尊興正あり。聖德太子に對する信仰一時に起りて、復古の風一世を靡かす。從て經典の開版も盛んにして、諸宗の典籍に及び、或は一百卷、或は六百卷の如き大部の開版あるに至れり。

東大寺再建の大勳進俊乘房重源入宋し、彼土の技師陳和卿等工人を率ゐる來るや、宋風の建築輸入せられ建築史に一時期を劃せし如く、禪宗新に來り、宋朝の文化を請來せしかば西大寺の律僧にして入宋せるものあり、宋朝の新趣味は古都にも滲潤し來りぬ。即ち華嚴に於て二水長水子晋水源并に四大家師會、觀復、希迪、道亭の著述を傳へ、律に於て允堪智圓、元照大智の撰述を傳へ、教學面目を改め、開版に於ても、宋版の影嚮を受け中には宋も行書風宋風を摸し、裝潢も亦支那趣味を帶び、著く前代と好尚を異にす。法華義疏吉十二帖、起信論義記の如き、西大寺開版の律部の如き、此方面を代表するものなり。而して他の一方には又前代の風を承け、愈和様の趣味を發揮し、料紙の美、指墨の精、裝潢の優雅、前後に比なき精妙なる春日版の現はるゝあり。寧樂佛教の開版は此時を以て黄金時代と爲す。唯識部の經疏・論疏を中心として、太子三經疏・持犯要記・起信論の如き亦此系統を汲むものなり。當代に於ける寧樂の開版は右の二様にあらざれば、其何れかに類似せるものにして、此風足利時代の初めに及べり。

五 和様の摺經

前代の風を承けて、之を醇熟し、完成したるもの、中、最も精美なるものは春日版なり。春日版の中にも、精なるもあり、比較的粗なるもあり。一部の巻数の少きものは精を極め、大部のものは粗に傾くを免れず。唯識論の開版は建仁元、承久三年、貞和三年、顯正原氏女を始め、數度に及びしもの、如く建仁版は本だ之を見ず、承久版は聖語藏に存す。料紙も厚き鳥子と爲り、書風肥厚にして優婉、指墨漆黒眼を射る。述記・了義燈・演秘等の唯識論の註疏續出し建久六年の述記の模倣、一政明編寺に現存す、經要・唯識二十論・一乘義私記眞等に及べり。

唯識論及び其註疏に亞きて、法相宗の重興瑜伽師地論一百卷、建曆三年弘睿に依りて開版せらる。實に空前の盛事なり書風に比して察し、續いて心經幽贊貞應三年、同幽贊添改科貞應三年、因明正理門論貞應元年、地蔵本願經嘉元四年、其の他、法華・仁王金光明等の護國經典并に大般若經六百卷貞應に始り、五部大乘經等の開版あり。此等の模倣は足利時代の分を併せ二千數百枚令に興福寺に蔵し、我が開版史上の偉觀たり。「神恩奉謝、唯識弘通」の爲にといふ本質的條件よりいふ時は、春日版に屬せず。雖も、其書風、指墨、料紙等の様式上よりいふ時は、春日版と同一の形式を有するもの少からず。聖德太子の信仰一時に勃興するや、御撰の三經義疏勝曼、法華、維摩を始め、憲法十七條・四箇文其に弘安八年に至るまで開版せられたるが實治の三經疏法華疏にのみ實治元年これども、三書ともは此種の代表的のものなるべく、寶篋印陀羅尼經建長三年、起信論寛元元年、持犯要記寛元二年、大安の如き最も三經疏に近く、東大寺眞言院住持聖守の開版に係る盞蘭盆經、即身成佛義共、法華遊意同四、三論要義同八、維摩經文永、理趣經建治の如き、相互の間に少異あれども、大体は此の系統に屬す。承久二年の替割經、亦此部に入る可し。

鎌倉時代に律宗の復興あり。西大・招提の二寺を中心として法幢を識す中、招提寺の開版は多からざれど、表無表章正應五年は最も此形式に近く、應永に下ると雖も、通別二受抄應永二年律宗新學作持要文應永八年は亦此系統に屬す。要するに、興福寺は南都諸大寺中、東大寺に拮抗して、最大勢力を有し、春日版が一般寧樂版の主系を爲す以上、其形式が諸大寺を風靡せしは、誠に所以ありと謂ふ可し。康永三年、樂師寺開版の樂師本顯經。嘉慶二年、法隆寺開版の隨心如意輪心經の如き亦同じ。

六 宋風の摺經

春日版の様式が藤原文化の粹を集めて、鎌倉初期に大成し、諸大寺の開版を風靡したるに對し、他方新興の禪宗と共に輸入せられ、東大・大伽藍復興の新氣運に乗じて、東大寺を中心として起り、開版上一新機軸を出せるは新式の摺經なり。即ち唐様とも稱す可く、宋風とも名づく可し。而して仔細に觀察すれば、之に三種の様式あるを觀る。

其一は摺經に於ける宋代文化の表現法を自家に取り入れて、謹嚴にして精美なる書風を重厚にして雄大なる裝潢を以て、製作せられたるもの、其二は宋代の表現法を其儘に再現したるもの、即ち覆刻又は極めて夫に近きもの、其三は春日版の風に基づきつゝ、新來の書風を加味したるもの之なり。東大寺の華嚴五教章三帖弘安六年 大安寺の中論尙類正應五年 東大・廣隆諸寺三論學徒の協力開版せる法華義疏十二帖永仁三年成 の如き、第一類の代表的摺經にして、黒味を帯べる厚き黄紙、字劃正しき錢大の文字、赭色黝味に沈む重厚なる裝潢、如何にも大陸の風あり。東大寺の大乗起信論義記永仁五年智照 華嚴經探玄記總て六帖か 廿一帖嘉祥、元徳中、理覺開版、寧樂刊經史一九四頁に宋版覆刻と記したれど、明かならず。 圓覺經二帖之に二種あり、刊經史の圓覺。日本に覆刻とあるは誤なり。 同經略疏之鈔十二帖 普賢

行願品疏一帖、同隨疏義記六帖前者は澄觀、後明徳者は宗密の著 二帖の如きは正しく第二類に屬し、而も覆刻か、摸刻かは俄に判別す可からず。覆刻若しくは覆刻ならざるも、極めて夫に近きものたるは明かなり。又義天開版の華嚴經隨疏演義抄の摸刻正應元年理覺開版、貞一、遵書 并に時代は應永に屬すれども、三河守時則發願の法華嚴法界觀門一帖應永三年 も亦此類にして、但此書奈良版本邦撰述の三國佛法傳通緣起三帖 應永も亦此流を汲む摺經なり。以上二類の摺經は何れも折經なること、宋版大藏を始め、宋葉を摸したるものなる可し。本は見當らず。

第三は瑜伽師地論特に卷一の末に附せる譯場別位の書風 等の木派に屬しつゝ、新渡の書風を汲みしゆきかたにして、西大寺開版の諸經多くは之なり。西大寺は興正菩薩寂尊の徳望に依り、宗風大に振ひ、從て、開版も興福に亞ぎ、東大と拮抗す。大略戒律に關するものにして、大乘入道次第、同科共に文永七八年ならん。 梵網古述記科建治元年 梵網古述記輔行文集弘安元年 最勝王經科、同大科共に正應元年 勸發菩提心集三帖正應三年 教誡律儀七年正和五年の二回 梵網古述記正安四年 律宗作持別磨正和五年 及び菩薩戒本宗要建治二年、應永二年、文保二年の三回 等主なるものなるが、此外未寺の、此等は何れも書影比較的小にして、春日版の様式を襲へるものもあれば、亦謂はゆる此に云ふ第三類に屬するものもあり。輔行文集、古述記の如き、又康元々々法華寺尼衆等開版の轉女心經一卷の如き、亦此系統に屬す。

七 足利時代の摺經

鎌倉に復興せし寧樂佛敎も、文永・弘安を頂上として、漸次衰運に傾き、南北朝より應永の初に至るまでは餘勢を保ちしも、興福先づ衰へ、東大も亦之に隨ひ、時に武威を振ふことなきに非ざりしも、精神

既に枯凋し、復法燈の輝くを見ず。精力内に竭き、形骸外に枯る、は自然の數にして、著作に摺經に亦昔日の夢訪ぬ可からず。隨て佛教史も摺經史も、いはゞ殘山剩水、何の觀る可きものなく、前代の墮力を保つに過ぎず。書風は亂れ、裝潢は蕪雜にして、新機軸の擧ぐ可きものなし。唯興福寺が中心と爲りて、唯識諸典・五部大乘經・大般若經の類を頗る多量に産出し、全國の神社・佛寺に供給せしは一時の盛觀といはざる可からず。然れども、實用上社會の需要を滿せしものにして、強て功績をいはゞ、唯夫れ普及の一事のみ。

應永年中の開版としては、便宜上前章に合叙せし三國佛法傳通緣起東大寺、通別二受抄、律宗新學作持寺、要文以上、唐招提寺の如きあり。續いて、新藥師寺の藥師本願經永正二年(カ)、并に藥師寺の同經天文七年の開版あり。東大寺觀音院英訓の法華經弘治三年の如き亦其例に數ふ可し。

その他、寧樂佛教の法流に屬せざれども、大和の諸寺には二三の開版あり、多武峯天台宗の法華經長祿三年、顯主實話永正十六年、顯主英宗二回あり、釜口成就院眞言宗の大乗金剛不空眞實三昧耶經天文廿四年の如き亦參考に資す可し。佛頭屋本節用集亦此頃開版せらる。

要するに、此時代は足利氏の天下にして、禪宗の全盛時代なり。されば、宋・元版覆刻の謂はゆる「五山版」の時代にして、亦寧樂版の時代に非ず。末葉に及びては、群雄割據、戰塵京洛を鎖して、法燈明滅し、永祿の兵火に東大再び炎上して、摸板も摺經も俱に烏有に歸し、治承の兵火と併せて、文化史上の二大破壊を現出しぬ。

八 文祿・慶長と南都

秀吉天下を統一して、征韓の役あり。彼地の活字を獲て、本邦始て活字版起り、家康江戸に開府して、文教を獎勵し、開版の業俄に活氣を呈す。補注蒙求より慶長勅版に及び、活字版の流行は新時代の事象にして、伊勢常明寺宗存の如き活字一切經を企て、數十帖を刊行す。而も南都の開版は微々として振はず。現存するもの僅に二三に過ぎず。即ち慶長十二年元興寺極樂院の四分律行事鈔、同十七年の華嚴五教章奈良といふ明證なきも、東大寺の開版ならん。濟緣記年次未詳之なり。降りて、江戸時代に至りては、寺版漸く町版と爲りて、摺經のこも亦説く可きものなし。
(大正十四年九月廿一日記)

(備考) 寧樂佛教と開版に就き詳細に知らんと欲せば、拙著「寧樂刊經史」を披閱せられたし。
宗存開版の活字一切經の中、從來世に知られたるもの、外、京都青蓮院に、法苑珠林三十冊を藏す。
各冊「伊勢大神宮一切經本願常明寺宗存敬梓」次に年月あり。卷一には「寛永元年(甲子)十二月二十七日」
卷三には「元和九年(癸亥)九月十二日」とあり。其他大畧之に同じ。(九月廿三日追記)

寧樂古經選 卷下

目次

- 一、成唯識論述記 卷第十本
- 二、同 上 卷第七末
- 三、瑜伽師地論 卷第一百
- 四、妙法蓮華經 卷第八
- 五、維摩詰經 卷上
- 六、法苑珠林 卷第二
- 七、成唯識論述記 卷第三
- 八、大乘木生心地觀經 報恩品第二
- 九、解深密經 卷第一
- 一〇、大乘阿毗達磨雜集論 卷第十二
- 一一、唯識論樞要 卷下
- 一二、金光明最勝王經 卷第一
- 一三、梵網古迹記輔行文集 第十
- 一四、梵網經菩薩心地品 卷上
- 一五、勝鬘經義疏
- 一六、維摩經義疏 卷上
- 一七、法華經義疏 卷中
- 一八、勝鬘經

- 一九、佛說盂蘭盆經
- 二〇、大般若經 卷第五百七十八
- 二一、般若理趣經
- 二二、持犯要記
- 二三、佛說雨寶陀羅尼經
- 二四、法苑珠林 卷第二
- 二五、同 上 卷第五
- 二六、成唯識論了義燈 卷第三
- 二七、成唯識論演秘 卷第三
- 二八、妙法蓮華經 卷第八
- 二九、法華攝釋 卷第三
- 三〇、般若心經幽贊 卷下
- 三一、般若心經幽贊添改科
- 三二、金光明最勝王經 卷第十
- 三三、同 上 同
- 三四、華嚴經中一乘五教分齊義 卷下
- 三五、大乘起信論義記 卷下
- 三六、中論偈頌
- 三七、法華義疏 卷第一
- 三八、同 上 卷第十二
- 三九、地藏菩薩本願經 卷下
- 四〇、三論玄義

- 四一、大方廣圓覺修多羅了義經 卷上
- 四二、同 上 同
- 四三、圓覺經略疏之鈔 卷第一
- 四四、普賢行願品疏
- 四五、注華嚴法界觀門
- 四六、三國佛法傳通緣起 卷下
- 四七、尊勝陀羅尼
- 四八、大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔 卷第二下
- 四九、同 上 卷第一上
- 五〇、同 上 卷第四下
- 五一、同 上 卷第三下
- 五二、大乘入道次第科
- 五三、般若理趣經
- 五四、大般若經 卷第一百
- 五五、妙法蓮華經 卷第八
- 五六、同 上 同
- 五七、華嚴經中一乘五教分齊義 卷下
- 五八、四分律刪補隨機羯磨濟緣記 卷一上
- 五九、成唯識論了義燈 卷第一
- 六〇、起信論義記 卷上
- 六一、起信論 上
- 六二、同 上

- 六三、佛說轉女身經
- 六四、成唯識論 卷第三
- 六五、同 上 卷第九
- 六六、梵網古迹記 卷下
- 六七、菩薩戒本宗要
- 六八、同 上
- 六九、同 上
- 七〇、同 上
- 七一、梵網古迹記科
- 七二、教誡律儀
- 七三、孟蘭盆禮文
- 七四、律宗新學作持要文
- 七五、表無表色章科分
- 七六、藥師琉璃光如來本願經
- 七七、通別二受抄
- 七八、妙法蓮華經 卷第八
- 七九、同 上
- 八〇、四分律刪繁補闕行事鈔 卷下
- 八一、律宗作持羯磨
- 八二、即身成佛義
- 八三、一乘義私記 卷第三
- 八四、妙法蓮華經 卷第八

- 八五、大乘立論 卷第二
- 八六、金剛般若波羅蜜經
- 八七、佛本行集經 卷第十九
- 八八、同 上
- 八九、大唐西域記 卷第十
- 九〇、同 上
- 九一、般若心經疏
- 九二、同 上
- 九三、般若心經詒謀鈔
- 九四、同 上

備考 一五、興福寺藏。六一九、二一—二三、法隆寺藏。二四—二八、藥師寺藏。二九—三八、四〇—五二、東大寺圖書館藏。二〇、三九、五三—八一、唐招提寺律宗戒學院藏。八二—八四、編者藏。八五、九一—九四、東寺金剛藏藏。八六、大英博物館藏。八七—九〇、南禪寺藏。

一、成唯識論述記

卷第十本

卷子本

豎九寸六分五厘

法自相以義无尋智知諸法異別相以辞无尋智知不
壞說諸法以樂說无尋智知諸法次第不断說也又解
第一知法无躰性第二知法生滅相第三知法假名而
不析假名法說第四知隨假名不壞无邊法說又解一
知法異別二知義異別三隨言音而為說法第四隨所
樂解而為說之辨有多複次說不能盡別應勘瑜伽六
十六卷備義不用於此中會

成唯識論述記卷第十本

康治元年

五月十日

東洋

別山

...

...

...

...

...

...

三、成唯識論述記

卷第七末

卷子本

堅九寸六分五厘

頤如以滅定前心多有無漏非此三根攝也。論有頤
雖有塗非後三根。述曰雖有遊觀而不明利想微細
故非後三根然說彼是已知具知以無妨也不順三根
以不明利故不說彼非彼不攝若不攝者三無漏根攝
無漏根不盡也。論二十二根至如論應知。述曰此
諸門儀如五十七等說。

成唯識論述記卷第七末

去智自斯已後為新煩惱無復應知新究竟
者謂通究竟者煩惱斷由彼新故圓證究竟
證心解脫及慧解脫如是略引隨順此論境
智相應摩阻理迦所有宗要其餘一切隨此
方隅皆當覺了通行一切摩阻理迦如攝釋
勿應知其相如來法教數無限量何能窮到
无邊彼岸隨此方隅隨此引發隨此義趣諸
聰慧者於餘一切應正尋思應正覺了

瑜伽師地論卷第一百

沙門於睿依專心上人命勸都鄙貴賤類業
欺喻如論一部摸下時達覺夫自致切矣
類以作摸取生福 念法久住利有情
主伴勸進結緣眾 眾生如是終成佛

四妙法蓮華經 卷第八

卷子本 整五寸一分

者當世世牙齒疎破 髀骨平鼻 手脚緣及眼
目角脉身體臭穢 惡瘡膿血 水腹短氣 諸惡
重病 是故普賢若見受持是經 與者當起速
迎當如敬佛 說是並賢勸發 品時恒河沙等
無量無邊 菩薩得百千万億 放施 隨羅尼三千
大千世界 微塵等諸菩薩 具普賢道 佛說是
經時 普賢等諸菩薩 舍刹 弗等諸聲聞 及諸
天龍人 非人等 一切大會 皆大歡喜 受持佛
語 作禮而去

妙法蓮華經卷第八

依有夢想之普賢念成就

現尚二世之經 寫指寫法卷

法苑珠林八卷而奉納春目法

寶殿也

貞和元年十月十日 尾觀妙

南無阿彌陀佛

猶如來福田之相無所分別等干大悲末

求果報是則名曰具足法施城中一取下乞

人見是神力聞其所說皆發阿耨多羅三

三菩提心故我不任誦彼問疾亦名世如是諸菩薩

各各向佛說具本緣稱述維摩詰所三言皆曰

不任誦彼問疾

維摩詰經卷上

開壹卷平板顯大森幽涼興三寶妙道

翻四種鴻懸芳妙并師弟衆生及我心

願此出嬰野卷皆入覺林

千時文永二年丁卯歲飲三月十一日

東大寺真言院住持 沙門聖守

六法苑 林 章 第二

枯葉木 堅九寸四分 橫六寸

新鄭義略以十門解釋 一釋名 二出體 三依職

分別 四依道分別 五依觀分別 六依行分別

七依品分別 八依部分別 九所依分別 十問答

分別 第一釋名者鄭者覆義開義由所知鄭覆所知

境令智不生由煩惱障闕大涅槃令不現證由覆障義

故云都名諸者不續義由无漏道斷其種子令不相續

名之為斷及由有漏无漏道力決其現行令不相續名

事康後學徒詳而易矣可謂義高千輩理光万代讚詠

吟詠何以暢其歡情所恨長響伯牙之琴屢盡不知之

墜耳

德苑林章第二



七、成唯識論述記

卷第三

卷子本

豎九寸六分

應門 論以一切法至一切法故 述曰此并緣境緣
十八界有為無為鏡智遍緣一切法故 心等自性及相
應法皆悉能緣 見分亦現自證分歎及相應歎故名遍
智如第^知二卷已解佛地第^知四下第^知十卷諸門分別下第
七解轉何界識生鏡智等上來惣以十門分別第^知八識
說此隨頌文若相應法例本識者即十一門若別隨釋
即有無量一一如前別門解釋惣是第^知一諸門分別釋
頌文訖

成唯識論述記卷第三

法苑珠林卷第三 六月二日於兵庫初點畢 沙門玄理

凡以此印行自他用法者

九解深密經 卷第二

卷子本 堅八寸五分五厘

卷子本 堅九寸一分

八大乘本生心地觀經 卷第二

大唐三藏聖教序

蓋聞三儀有極，四時無滯。

寒暑以化物，是以窮天地之賾，思智識其端。

明陰洞陽，賢哲莫其數，然天地苞孕，庶

陽而步，識者以育，有體也。陰陽殿乎天地，而

難窮者以其無形也。故知豫蹕可縱，雖愚不

惑。形潛真規，在智精遊，現乎佛道，崇虛乘幽。

大乘本生心地觀經卷第二 釋教奉 詔譯

介時世尊從三昧安詳而起，告稱物菩薩摩

訶，薩言善哉善哉。汝等大士，諸善男子，為欲

親近世間之父，為欲聽聞正法，為欲思

惟如如之理，為欲稱習如如之智，來詣佛所，

供養恭敬，我今演說心地妙法，引導眾生，令

入佛智，如是妙法，諸佛如來，過無量劫時，乃

九 解 深 密 經 第一 (二) (卷尾)

卷子 堅八寸五分五厘

一〇 大 乘 阿 毘 達 磨 雜 集 論 卷 第 十 二

卷子 堅八寸八分

秘密善巧菩薩如來膺此施設救為於心意
識一切秘密善巧菩薩余時卽尊欲重宣此
義而說頌曰

阿陀那識甚深細
我於九愚不開演

一切種子如暴流
惡殺分別執為義

解深密經卷第二

聞聲聞藏法喜菩薩摩訶薩等授法身所疏何故
有情以香鬘華鬘養菩薩藏法便生廣大无
邊福聚那聲聞藏法耶答以菩薩藏法是一
切有情利益安樂所依緣故能建大義故无
上无量天功德聚所生緣故

大 乘 阿 毘 達 磨 雜 集 論 卷 第 十 二

卷子本 堅九寸二分

隨所依緣捨別感力皆道四部有依少緣多緣有依
多緣少緣有依多緣多有依少緣少緣三行相可知
初二是何諦感為從所依判諦為從所緣俱不定故由

此應言所緣即所依緣謂緣藉故非所緣境不定故
有義所依即所緣境也以所緣境為所依杖依從所緣

判諦依不定故有義依與緣別如踪中解者依初二解

初二句無妨若依第三解初二句六何有解必無此者

有解隨增屬諦依增緣弱憐近引故屬依緣增係弱屬

緣疎遠引故謂本隨感業異緣生通感儀二巧覆自罪

為覆覆他為覆非也如比在足覆他兼罪亦名覆善薩

說他罪為罪善藉慶懼得生勢伏可除善者及分別煩

惱世間離欲汝何心故惡心皆覆此中且說自覆無惡

心皆善 本性不行 勢勢力故

樞要卷下

三 金光明最勝王經 卷第一

卷子本 堅八寸五分

金光明最勝王經序第一

如是我聞一時薄伽梵在王舍城鷲峯山頂
 於最清淨甚深法界諸佛之境如來所居與
 大慈蓋聚九萬八千人皆是阿羅漢能善調
 伏如大鳥王諸漏已除無復煩惱心善解脫
 慧善解脫所作已畢捨諸重擔建得已利盡
 諸有結得大自在任清淨或善巧方便智慧
 莊嚴證入解脫已到彼岸其名曰具壽阿若
 憍陳如具壽阿說侍多具壽婆溼波具壽摩
 訶那摩具壽婆帝利迦大迦楠波優樓頻螺
 迦構伽耶迦耨那提迦構舍利子大目犍連
 唯阿難陀在於學地如是等諸大聲聞各於
 時從定而起往詣佛所頂禮佛足右繞三

三、梵網古迹記輔行文集 第十

折本 鑿九寸八分五厘 橫三寸五分

及諸餘結障此罪故身不集滅慶為他解說法得大智
報以是說法故即集慧慶如是造此論集此四功德慶

古迹記輔行文集第十

自去又永十一之復至于建治第二之卷第八

自去眼集三藏要文真流通現代扶善薩行矣

建治二年丙子二月二日西大寺沙門嚴尊

邦六二 知安元年六月廿二日加監畢世休老老 辟事多姓馬利

即建治丙子仲春下朔初旬下月以知安元
年丙寅治洗三朝畢功矣冀也漸板三灾不
壞萬劫長存福業受持利益無窮者

知安元年丙寅西大寺幹緣比丘嚴尊謹題

一四 梵網經菩薩心地品 卷上

卷子本 陸九寸

梵網經序

夫宗本湛然理不可易是以竊舉妙於玄原之境万行起於深信之宅是以天竺法師鳩摩羅什諷持此品以為心首此經本有一百一十二卷六十一品什少踐於大方齋異學於迦夷弘始三年淳風東扇秦主姚興道舉百王玄心大法於草堂之中三千學士與什參定大小三乘五十餘部唯梵網經最後誦

可說奇妙法門品奇妙三昧門陀羅尼門非下地凡夫心識所及唯佛无量身心意可盡其原如光音天品中說十无異尊佛道同

梵網經菩薩心地品卷上

校合太子席

本取此經了

二五 勝壇經義疏

粘葉本 整八寸五分 橫五寸三分

麻勝姓義疏

此姓不傳曰宜
五松集非漫彼本

夫勝勝者本是不可思議

若夫士但遠照瞻聞之極宜以女實為化所以初

則生於舍衛國王蓋壽養之道中則為阿踰闍

憐夫入顯三從之禮終則嚴嚮釋迦共知摩訶衍

道論其所演則以十四為終談其大意非逆是

所以如來每該讀同諸

言則為迷

其名解名異不可以題卷首所以舉此二名以為

首題也經題去勝勝師子乳此舉第十五名一乘

大方便方廣舉第十六名第六後橋戶迄今以此

說以下重勸流通第七後帝釋白佛言以下

奉旨而受行也

勝勝姓義疏卷一

一六 維摩經義疏 卷上

粘葉木 堅八寸六分

橫五寸四分

一七 法華經義疏 卷中

粘葉木 堅九寸五分

橫五寸一分

維摩經義疏上卷

上宮皇徽製

維摩詰者乃是已登空覺之大聖也論本教身量
如真一談迹即示乃品同量德冠眾聖之表道也
有心之境事以无為為事相以无相為相何有
相可稱國家事業為煩值大悲无息志存益物
同世俗居士處志嗔耶村落而化緣既畢將歸妙
本現身有疾假憊干床謂以因疾發問為開不忍

譬譬說化中根人故目為品目也而此品應在意
攀譬說化中根人之首是蓋出經者欲以品使在
卷初故尔也後此下法說化上根人中第二名上
根人領解然若例下譬說化中根人應有四品
必上根人信解品而此法說又少不足及別品故
直名方便而已也就中亦有長行得長行中有三

安隱一依如是受持說顛倒真實如是受持
 說自性清淨心隱覆如是受持說如來真諦
 如是受持說勝夫人師子吼如是受持獲
 次憍尸迦此經所說第一切聲次定了義人
 一乘道憍尸迦今以此說勝夫人師子吼
 經付屬於汝汝乃至法信受持讀誦廣分別說
 帝釋白佛言善哉世尊願受尊敬時天帝釋
 長老阿難及諸大會人何稱羅剎閻婆等
 聞佛所說歡喜奉行

勝鑿經
 大永三年丙寅四月月厥
 菩提寺法苑藏

一九佛說盂蘭盆經

卷子本 卷七寸一分

無一切苦惱之患乃至七世父母離鐵
鬼若生入天中福樂無極是佛弟子修
孝順者應念中常憶父母乃至七世
父母年年七月十五日當以孝慈憶所
生父母為作盂蘭盆施佛及僧以報父
母長養慈愛之恩若一切佛弟子應當
奉行奉持是法將自連比丘四輩弟子歡喜

佛說盂蘭盆經

現存悲母 大屋如圓 性生極樂
見佛聞法 七世四恩 離苦得道
一切眾生 皆佛證果

建長三年七月十五日奉獻之

或對目

二〇、大般若經 卷第五百七十八

卷子本 竪八寸五分五厘

二一、般若理趣經

折本 竪七寸四分 橫二寸五分五厘

大般若波羅蜜多經卷第五百七十八

奏施 御壽經藏 大般若理趣分檢

願以般若彫刻力 奉謝神明三寶息

迴施一切諸眾生 冀藉魂當二世益

于時建長七年己二月廿六日 僧宗宏

此處應度那佛 般若理趣經

六之

正平二十年己三月廿一日

願依印板彫刻 聖朝都鄙皆安樂

乎此師資并親友 義及衆生成正覺

大寺寮前集衆禮佛 願壽經藏

三持犯

要記

卷子本 整八十八分

發意已來常行無所得法因法所得法故修前施持

戒乃至因無所得法故修智慧慈悲等意若無得戒

由未嘗修雖可行故念不修若不習故後心終

如是久久祇在其難故念後初以習其難習而漸增

轉成其易是謂斷行發趣大意究竟持略明如是

你依聖曲了義文

粗述戒藏開

普為法界燃一炷

願用傳燈周十方

四句三聚戒區滿

六意五修六持

遠離二邊滅諸罪

等食一味送芬外

持犯要記一卷

寬元三年甲辰十月廿四日傳戒單

勸進大安寺僧信忍

三、佛說雨寶陀羅尼經

卷子本 豎八寸四分

若佛不思議佛法亦復空淨淨言不思議以緣亦復空
寂慧一切智法王不滅已到勝彼岸誓有佛菩薩
命時具壽阿難陀問佛說此雨寶陀羅尼經
為讚歡喜白佛言世尊身說法要當何名
經我等今者為何奉持

佛告阿難此經名妙法之所問汝當受

亦名能獲一切財寶伏藏亦名一切如來

讚雨寶陀羅尼經之妙法也。眼薄伽梵說此

經已無量劫及諸菩薩并諸天人阿耨羅

等一切大眾聞佛所說。養信受奉行

佛說雨寶陀羅尼經

于時寬喜三年歲次甲子。廣勸進有緣衆

敬奉獻此經模為念。若得富饒令有疾病

無疾病也若有信樂者必求其養信受奉行

寺方人善根寺

二四 法苑 林章 卷三

粘葉木 整八寸八分 橫五寸一分

諸經論雖有諸德雖傳然諸後學未能踰常基隨斷證

之次略纂所聞其間委細後更欲審評以編集以為一

重庶後學徒詳而易矣可謂義高千葉理光方茂讚詠

吟詠何以暢其歡情所恨後響伯牙之琴虛盡不和之

壁可

法苑林章卷三

傳頌表沙門但三

七年之

聖皇

宣文十二年於中日於紙合作柳

法苑林章

三五 法苑 林章 卷第五

粘葉本 經八寸八分 橫五寸一分

誰能驅彼知有真如即本後智之應无別又諸菩薩雖

入滅定尚起威儀遊諸淨土此由定前意樂擊散本識

相分現諸威儀後雖滅心威儀不滅由第八識持緣被

故此位威儀依何本質示示八地以上普獲入滅定後

无前意識發起威儀即應不成會入定之非不起定

現諸威儀如是便遠變靈經典又梵王華嚴本形類帶

前聽法談論語言前發變心意識已滅以非定道識時

現在前此兩變形唯第八境彼以何法為本質耶第八

地三定耶故自訂定擊碎投本質者无不受統唯識

說契當深宗集量未行且依現教性境不隨心攝散唯

從見帶質道情本性種等隨應

大乘法苑珠實卷第五

東坡居士

二六 成唯識論了義燈 卷第三

粘葉本 豎九寸三分 橫五寸

成唯識論了義燈卷第三 論本第三 緬洲大德寺慈慧藏

論南三有為之有為相具如說解然唯婆沙卅八云如
律諸者諸有為相是不相應行攝所攝少同大乘即經

部本師然通離識不離識別在下例破分別論者說此
能相皆是無為法密部說三相有為滅相无為立无為
者非此所破下无為中方始例破此等雖立解有為相
能不相應以論文中標結但破不相應豈有言已他解
豈故此不破今謂不尔非已破今此不破諸不相應

二七 成唯識論演秘

卷第三

粘葉本

豎九寸一分

橫五寸

或男或女識若新發滅者名色得增長廣大不不也
世尊如是等此若欲離何賴耶識理不可成擇曰既
云識壞名色不增明為緣識必相續也相續識者即
我賴耶此等文義今第七證義皆攝之
成唯識論演秘卷第三

才三天論

傳寶五五師

元妙法蓮華經 第八卷

折本 竪八寸 橫二寸六分

無量無邊菩薩得百千万億旋陀羅尼三千

大千世界微塵等諸菩薩具普賢道佛說是

經時普賢等諸菩薩舍利弗等諸聲聞及諸

天龍人非人等一切大會皆大歡喜受持佛

誥作禮而去

六千五百九十二卷之三

妙法蓮華經卷第八

六千六百七十一

生疏卷也

發護持法 利樂有情願窮盡未來際 敬身法華蓋

廣衆人攬尊 廣流布諸國 平興法利生 自他悉成佛

兼度衆之願 至心性

願身具也

二九法華

萃 攝 釋 卷三

折本 緊九寸一分 橫五寸四分

有義攝之中心一向有魔能為留難

魔中容之出亦有亦元不同餘方示現為魔故讓佛法

踞既怯威嚴所以戰懼者聞習種俱亡影鶴元怖一柯

聖者猶懼威嚴者如來大悲誠不感物聲聞小智長疑

懼心今舉鼻情云怯威德有義三又自謂已解大棄毀

猶未見為搜記三又復恐自所解非隨增上揚故悚

也又喜次至懼懼於未堪書懼文無罪以悚標 疏

竹名假也相假者排火品等經假有三種一者名假

謂受假三者法假名即是被三假名收相即攝彼受

法二假由借三假故名相 經劫者有寶國名寶王

者空理為依起塵沙德

法華攝釋卷第三

三〇 般若心經幽贊 卷下

折本 陸九寸六分 橫三寸九分五厘

奉勅芝鸞裝。姪曰故說般若波羅蜜名咒師說

咒曰

揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提莎訶

贊曰前說法義二持難勸信學欲令神用速備更

說咒持佛以大劫慈悲難修誓行加略文字意趣

深遠教理幽廣不易詳贊

般若波羅蜜名咒師說

貞應三年甲申正月十五日為助先師

真歸上入餘業敬彫模畢兼以此功

令故權大僧都重信蕩流轉妄執趣

菩提正道及自他群類同開真解矣

鎮圭性如

三一 般若心經幽贊添改科

卷子本 一尺〇五厘

如應後說密咒持二 後方解二 後顯光誑對 後利生稱 後惣并随心二 後釋二

初縱奪標舉贊 初欵意趣深遠佛 初舉劣念持而獲現益二 初念所

後隨釋經義二 後歎不易詳贊教 後現勝修因必證當果况 後持天

般若波羅蜜多幽贊添改科

寬喜三年辛卯十月日依悲母禪屋性如之遺

言敬彫此模於迴向者併任幽隱所願而已

願主藤原氏女

此模負板一枚共墜之間為六方沙汰刻彫之

寬正二年辛巳十月日

三 金光明最勝王經

卷第十

卷子本

豎八寸六分

布乃至於我般涅槃後不令散滅即是无上

菩提正因所獲切德於恒沙劫說不誑誑善

有甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚甚

男子善女人等供養恭敬書寫流通為人解

說所獲切德亦復如是是故汝等應勤修習

今時无量无邊恒沙大衆聞佛說已皆大歡

喜信受奉行

金光明最勝王經卷第十

魏 暉 航 胡 鵠 在 檣 巨 鍾 鍾 昏 情 門 胡 顛 香

大周長安三年歲次癸卯十月己未朔

四日壬戌 三藏法師義淨奉 割於

長安西明寺新鑿并綴文正字

翻經沙門大周西寺仁亮證義

翻經沙門大惣持寺上座大儀證義

翻經沙門大周西寺主法藏證義

翻經沙門佛授記寺都維那惠表筆受

翻經沙門大福先寺勝莊證義

翻經沙門大福先寺都維那慈凱證義

請翻經沙門天宮寺明曉

奉交

願以施入所生功德七世是離苦得樂生世、值遇三寶

在處、受持妙法、救濟眾中、用信深心、念法、念僧、得聞信受、
展轉教化、普善化、從善法行、終得世之三善善凡

別立自性身為明法身是恒沙功德法故是故深稱
論云自性身與法身作依一故三亦於報身內福智
分二故有四如楞伽經云一應化佛二功德佛三智
慧佛四如如佛此約終教說或立十佛以顯無盡如
離世間品說此約一乘圓教說

華嚴經上二乘五教分齊義卷下

夫法界宏高圓宗玄邃僅預法筵剩念弘通
仍勸有緣諸人遂開一部模板庶幾遐方終古
流演傳布而已

弘安六年 癸未 九月八日 沙門 禮 謹誌

折本 竪八寸七分 橫四寸六分五厘

意四以一切如來下轉釋漸三寶之義此中二句初
約果人依之得涅槃後約因人依之得菩提菩提涅
槃即是法寶佛僧可知由毀謗乖此故漸三寶也結
勸中三世菩薩同行此法更無異路故應懃修學也

正宗竟

得頌流通中初二句結上所說於中上句結義下句
結文後二句迴向利益上句明德廣下弁遺露也

大乘起信論義記卷下

此疏巨唐香象大師之述也陳一心之本源明

生佛元致極聖之所游履諸賢之所朝宗

蓋矣學者之宗之仰如飢如渴予念宣布莫如

開板明化有緣而鑿疏文庶乎從割墨而會象

寥假言象而窺義天鳥耳永仁丁酉之歲孟夏

禁足之日 華嚴宗沙門釋 智照 記

起信疏下

三六 中論 偽頌

折木 堅八寸四分五厘 橫三寸三分

彼受五墜者 古何一分破 一分而不破 是事則不然

受亦復如是 古何一分破 一分而不破 是事亦不然

若亦有無邊 是二得成者 非有非無邊 是則亦不成

一切法空故 世間常等見 何處於何時 誰起是智見

瞿曇大聖王 憐愍說是法 悉斷一切見 我今托覺札

中論偈頌一卷

夫斯本頌者八万藏之骨髓 十万頌之樞鍵

也故存玄道於絳域 領深不於無言是以西

天軌斯論而作注釋者七十餘家 東夏豈止

宗兮致鑽仰者幾許 處所甚合 都為駟祖師

式開中板 甚苦心獨悟之慧風 遍肩率手蕭然

物外之覽 目與羅扶桑耳

昔正應五禪 王 展南宮中 句於安寺 刊定流傳

三論宗 賢錄沙門 蔡慶謹誌

三七 法華義疏

粘葉木 堅八寸八分 橫五寸三分

三九 地藏菩薩本願經

折木 堅七寸九分五厘 橫二寸四分

法華義疏卷第一

序品第一

將欲入文前明三義一部類不同二品次差別三科經分齊部類不同者略為七例一者一會之經用為一部如十地等經二者多會共為一部如華嚴之類三者經之初分用為一部如六卷泥洹經四者具足二分以為

地藏菩薩本願經卷下

地藏菩薩本誓願
此經所明發信心
以此功德及法界
入天厭離生死海
釋尊切利附屬說
故更刻增傳未來
光救三途極聖苦
自他同獲菩薩化

嘉元四年丙午六月廿四日願美南都興福寺僧

覺性

南無

三六法

萃

義

疏

卷十二

粘葉本 堅八寸八分 橫五寸三分

自去承仁元空同三年送首尾三箇年之星霜間義疏十

二卷之印板訖即就澄禪宗師之講肆事討論因蒙京都

北嶺之舊疏加刊定如以擇統略新撰之相糾糾之點

畫之絳僅有宋末豈加崩新雕不柳尔哉向思爾賢察

文英賢察是風聞馬鳴龍樹自負樂於五天也八不止觀

之月獨耀靈嶺接婆羅灑法雨於三國也純持妙法之

華盛靈靈凌從余以降漢家本朝專弘此宗異鄉邊方雖

敢斯教代屬末法鑽仰無人時輩季澆書寫莫擬嗚呼從

推古天皇御宇至當代七百餘年相承僅傳宗綱將亂三

論章疏一無印板爨素慶幸蓬蓬蓬大乘忝聞難聞宏宗

宛似雪山上土為半渴兮投身相同香城墜堠末般若兮

癡血真結緣緇素同志兄弟尊駕非三非一之妙乘速到

非近非遠之寶所味當卷增那清原氏於俄七逆修偏

一妙理之世恩所禮也三果

雜錄之印板訖

都幹緣沙

丹入宋桑門慧叢護書

雕刻諸人華勝弘明恭

久信

盛秋

快賢

四〇三

論

玄

義

粘葉木 堅八寸四分 橫六寸二分五厘

為私破邪顯正宗
 早獲八不匹樹月
 新遂開極取文切
 遠拂三累迷倫鑿
 于時建長八年己卯三月七日沙門聖守

三論玄義
 慧日尊場沙州吉藏奉命撰
 本文二卷
 初編
 恐帝宗要開為二門一通序大歸二別釋眾品初明
 探列有二一破邪二顯正夫通化無方開誘非一考聖心
 教以息患為主統教意以通理為宗值九十六術極火
 罪為津道五百羅漢紫見絢為淚浪邊使庶範坵墟
 就身荆棘善道以之流慟薩羅可以大悲四依為此
 而興三論肉斯而作但論雅有三義雅二轉一冒顯
 六卷
 大經子明論
 卷五

四一 大方廣圓覺修多羅了義經

卷上

粘葉本 堅七寸八分 橫五寸四分

四二 同

上

卷上

折本 堅六寸九分五厘 橫二寸七分五厘

大方廣圓覺修多羅了義經略疏序

金華經卷中修多羅了義經略疏序

夫血氣之屬必有知凡有知者必同體所謂

靈覺明妙虛徹靈通卓然而獨存者也是眾

生之本源故曰心地是諸佛之所得故曰菩

提交徹融攝故曰法界寂靜常樂故曰涅槃

不濁不漏故曰清淨不妄不變故曰真如離

過絕非故曰佛性護善遮惡故曰捨持隱覆

含攝故曰如來藏起越玄闕故曰密嚴國統

四一 大方廣圓覺修多羅了義經

卷上

粘葉本 堅七寸八分 橫五寸四分

四二 同

上

卷上

折本 堅六寸九分五厘 橫二寸七分五厘

大方廣圓覺修多羅了義經略疏序

金華經卷中修多羅了義經略疏序

夫血氣之屬必有知凡有知者必同體所謂

靈覺明妙虛徹靈通卓然而獨存者也是眾

生之本源故曰心地是諸佛之所得故曰菩

提交徹融攝故曰法界寂靜常樂故曰涅槃

不濁不漏故曰清淨不妄不變故曰真如離

過絕非故曰佛性護善遮惡故曰捨持隱覆

含攝故曰如來藏起越玄闕故曰密嚴國統

四三 圓覺經略疏之鈔

卷第一

折本

豎八寸九分五厘

橫四寸七分

相是心之行處故古德云口欲辯而辭喪心將緣而慮息則迴
 出於言象之表矣云心言不及者謂法無名故言不及
 法無相故心不及於所緣境非定名定相故於心口不
 可思議何法不思議即圓覺性相無礙也何故不思議
 即深而淨凡聖通局之類一何用不思議假名引導尚恐難入
 今泯絕蹤迹於生何益顯法超情今亡言故謂法體實離思議之
 境若今住思議永不能入今說離言超情眾生即忘言
 絕慮不住言象而求之自然入也故六七祖師皆有善
 惡不思議等言矣

圓覺經略疏之鈔卷第一之一

之一

法苑珠林卷第一

四 普賢行願品疏

折本 堅九寸 橫四寸

四五 注華嚴法界觀門

折本 堅九寸二分 橫三寸五分

清涼國師行願品疏一卷圭峯同記六冊諒解纜

於普賢之願海嚴臺於毘盧之覺岸然巨誓盛行

之後吾朝流傳以降未有鱗跋已矣故圓乘學人

日羸靡弗之功夜伴蟾影之耀於德源為專思

祖承宣通兼救宗徒辛勤投輕微之消塵并与善

之發貨聚多少板木開七軸疏記遂置東大寺戒

壇院者也曩稽寫數本流行萬世昔明德辛未七

月日 戒壇院住持沙門揆融 弟輩比丘極深謹誌

注華嚴法界觀門 六

右此觀者圖法界之廣都陳毗盧之玄明於

此蓋矣乎思宣通莫如開板則投淨感而鐵

良梓庶乎邀方流漢終古傳布而已

千時應永丙子仲春日三河守源時則謹誌

一 毘王彈正為經

四六 三國佛法傳通緣起 卷下

折本 堅九寸 橫五寸四分

及三祇際合十七將不載之彼載
法聖
紙所而也

戒壇示觀律師學該乎三藏智辯

汗瀾焉正有性相猶庵丁之於牛

也且所遺之心數九千有餘卷焉

然不出卷而按諸宗之闡域知三

國之傳通者莫若乎斯書也苟從

事于此者豈不云乎回千里之迷

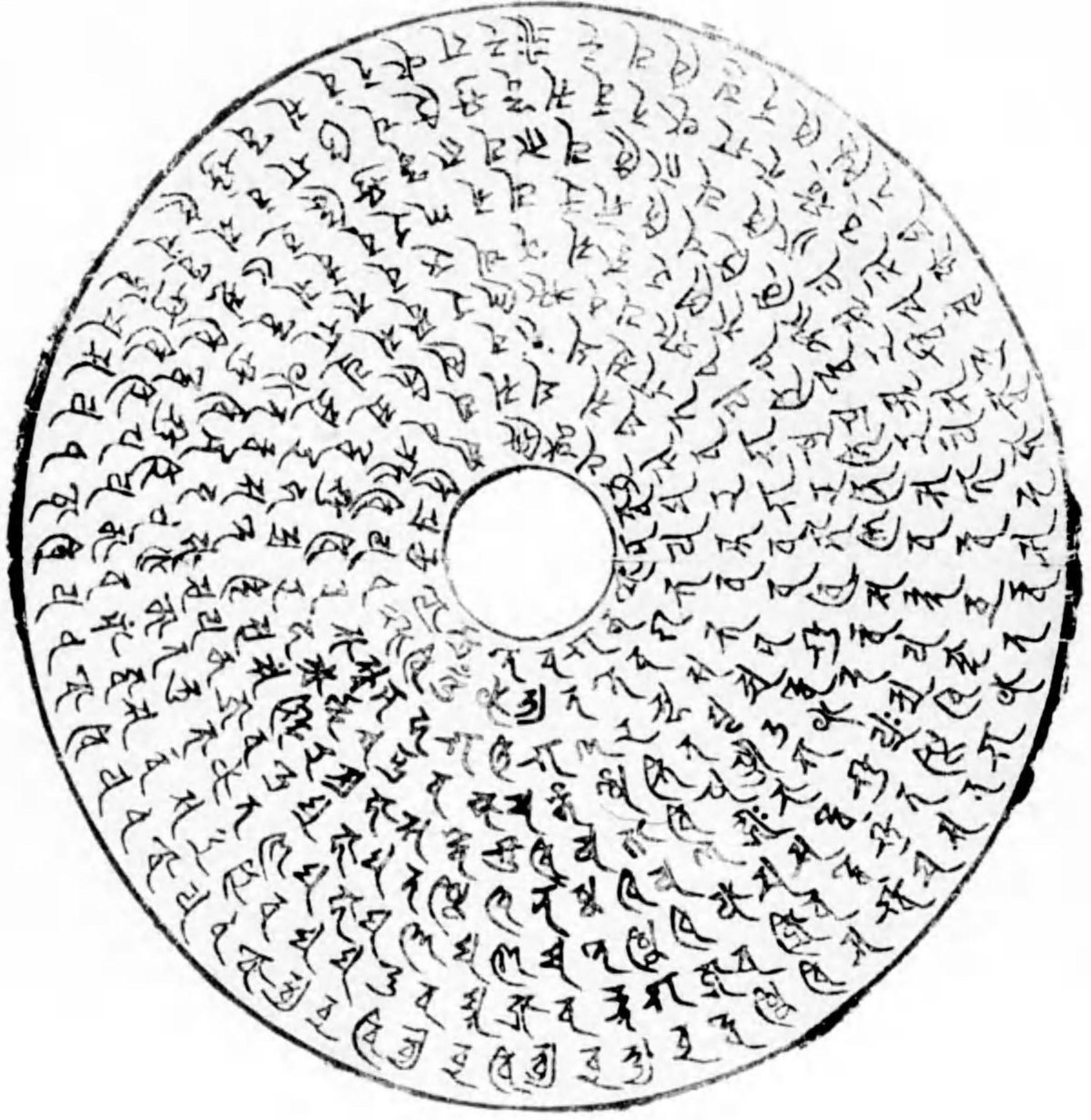
建者一呼之力也不過於斯說則

吾終昧於大方者邪所恨未約刊

行所利不廣仍命工鐫板云尔

應永巳卯正月 日撥深護壽

此書一部三帖依無點字少字字皆由通波昌請示而通也



四七尊勝陀羅尼

直徑 六寸八分

折本 縱九寸四分 橫五寸四分

四諦觀行等故如花嚴涅槃皆有四聖諦品廣顯其
 相大乘等經非無觀行等故 疏二賢首所立等者
 以下文依之故今略指然昔來更有者闍法師立六
 種教一因緣宗教二假名宗教三不真宗教謂諸
 法如幻化等四真宗教謂諸法真空理故五常宗
 教謂說真理恆妙種種恆等故六圓宗教如前建
 師今不教者前四名即衍公四宗義在五宗之初第
 五爾第五時第六同諸師圓教故略不引又真宗說
 真空理常宗說真理恆妙功德常恆既真空理非常
 宗應同無常又三與四但法喻之別故並不引上來
 此方立教竟

大方廣佛華嚴經疏演義鈔卷第十 三

右為令法久住利益眾生所令開板也一
 正慶元年 申五月廿日 庸嚴法橋理覺

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔序

清涼山大花嚴寺沙門

盛觀

述

至聖垂誥鏡一心之玄極大士弘闡燭微言之幽致
雖忘懷於詮旨之域而浩汗於文義之海蓋欲寄象
繫之迹窮無盡之趣矣斯經文理不可得而稱也晉
譯幽秘賢首頗得其門唐翻靈篇後哲未窺其奧不
揆膚受輒闡玄微偶溢九州遐飛四海講者盈百咸
叩余曰大教趣深疏文致遠親承旨訓髣髴近宗垂
範千古慮惑高悟希垂再剖得覩光輝順斯雅懷再
此條理名為隨疏演義昔人云人在則易人亡則難
今為此釋異遊方終古皆若面會然繁則倦於章句
簡則昧其源流顧此才難有慙折中意夫後學其辭

五〇、大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔

卷第四下

卷子本

整凡一尺

薩法門品若諸衆生不種善根不可得聞解脫月菩

薩言聞此法門得樂所福金剛藏菩薩言如一切智

所集福德聞此法門福德如是何以故非不聞此功

德法門而能信解受持讀誦何況精進如說修行是

故當知要得聞此集一切智功德法門乃能信解受

持修習然後至於一切智地釋日聞尚齊於種智何

況讀誦思修不可量也經雖舉聞爲顯勝故意通思

修故疏云讀誦思修功齊種智耳 疏宿生何幸下

第三感慶逢遇可知餘諸感通具於傳記上來所引

粗舉數條耳

華嚴抄 傳譯感通竟

卅

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第四下

卅五

大安十年甲戌歲高麗國大興王寺奉

宣雕造

五、大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔

卷第二十下

卷子本 豎凡一尺

界窮未來際無盡功德故疏云亦是別顯無盡功德
疏法性深廣下即大文第四謙讚迴向上半謙
讚上句讚下句謙下半迴向三處初句迴向實際後
句迴向衆生及迴向菩提然迴向菩提略有二意一
自成菩提二令他成令他成者義同迴向衆生菩
薩發心不期自為即以向他為自益耳故今合識同
證菩提

大方廣佛花嚴經隨疏演義鈔卷第二十 下 天

壽昌二年丁丑歲高麗國大興王寺奉

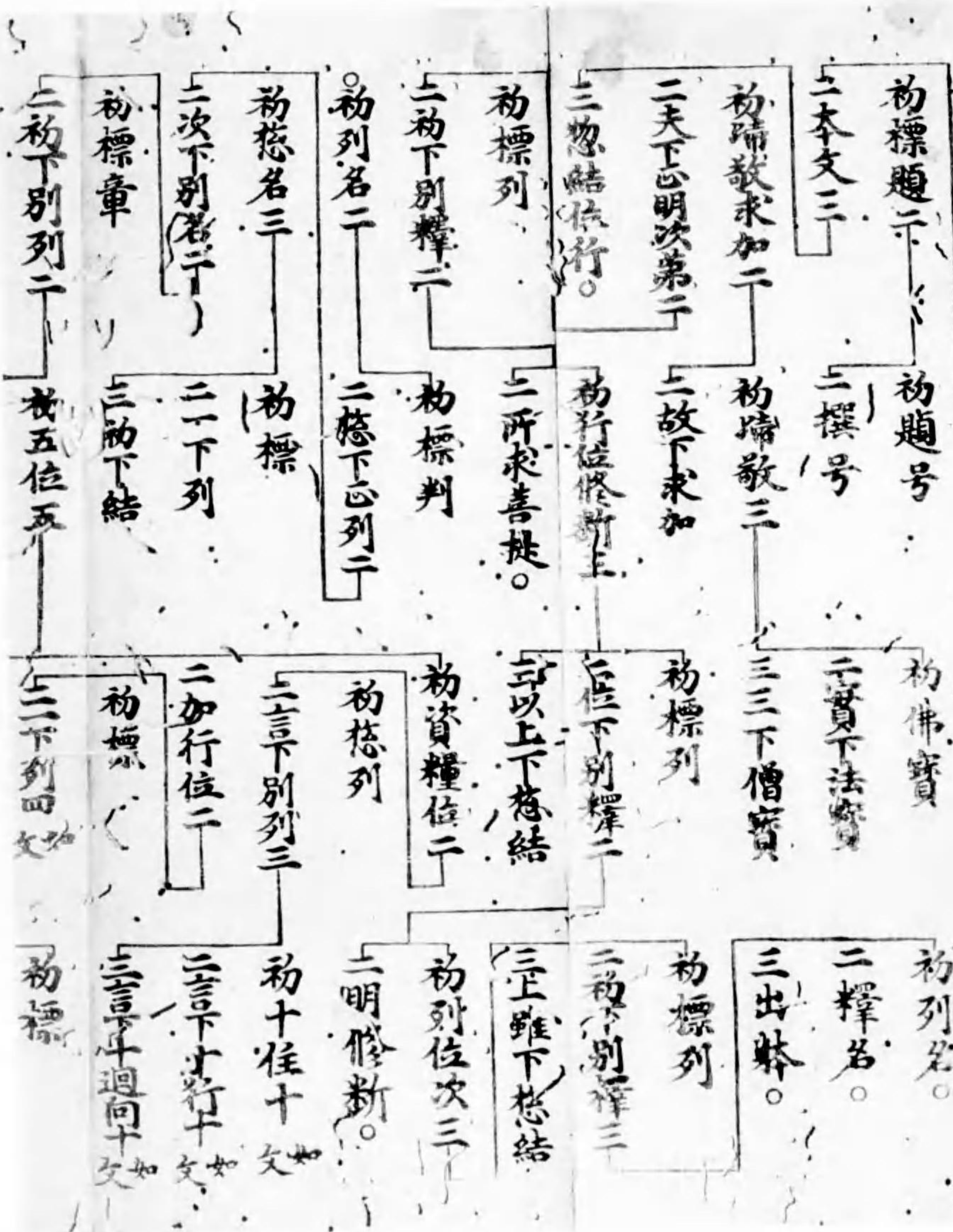
宣雕造

天

五、大乘入道次第科

折本 豎九寸七分五厘 橫三寸八分弱

大乘入道次第科分二



五三 般若理趣經

卷子本 竪七寸三分

五四 大般若波羅蜜多經 卷第一百

折本 竪八寸一分 橫二寸五分

為今持有恭成就

皆大歡喜信受行

般若理趣經

願依平極厥列功

聖朝都鄙咸安樂

芳妣師資并親友

我及衆生咸正覺

建治二年丙子三月七日

沙門聖守開之

大般若波羅蜜多經卷第一百

願以此善普及自他生世開發智慧修學佛法展轉宏

授為世燈明五十七億六方歲間見佛聞法因緣純熟大

聖慈尊成道之時親近奉仕發菩提心塵刹之中修習

般若回思法界同證佛道

嘉祿三年丁三月廿六日當慈父周忌辰奉

願

釋軌真敬白

五六同

卷子本 經八寸七分

上 卷八

卷子本 經八寸八分五厘

五五 妙法蓮華經 卷八

妙法蓮華經卷第八

天龍入非入等一切大會皆大歡喜受持佛
語作礼而去

嘉祿元年 初冬中旬 嚴刹已畢 沙門於春
願以模切 垂身施眾生 恭成佛道 即說此經

妙法蓮華經卷第八

語作礼而去

真盛變

大千世界微塵等諸菩薩具並賢道佛說是
經時普賢等諸菩薩舍利弗等諸聲聞及諸
天龍入非入等一切大會皆大歡喜受持佛

備州性海宗常住

大願主富田則兼

應永

德佛三智慧佛四如佛此約終教說或立
十佛以顯無盡如離世間品說此約一乘圓
教說

華嚴經中一乘五教分齊義卷下

慶長十七年壬十月吉日

五七 華嚴經中一乘五教分齊義 卷下

綴本 竪一尺〇四厘 橫七寸四分

五八 四分律刪補隨機羯磨濟緣記 一上

綴本 竪九寸三分 橫六寸五分

若此爲心乃真持戒自餘曷散無足言之雖嚴整容儀謹
守戒行但驚九眼未合聖心學者臨文宜應自照座上發
露初文是縱然下即奪謂律制發露常途對首在衆心念
兩法各制非是從開故云文制兩設以對首心念須果無
入今此對衆作法自成故知別立不類對念後之二位列
名指不廣在後篇

四分律刪補隨機羯磨濟緣記 一上

南京招提寺清泉苑淨別二萬開疏記兩卷
庶使律教不墮佛種無窮

幹塚比丘宗辨志



五九 成唯識論了義燈

卷第一

卷子本 豎九寸五分

依他是緣生境依亦勝義二相見對相分是假依見起
假境依識唯俗有見分是實能起相是假境依勝義有
第三勝劣對世間世俗唯世俗有後三形前亦勝義心
第四凡聖對凡境唯世俗聖境亦勝義雜有四解此中
文意但依初對問依凡聖緣遍計亦應名勝義諦答許
亦无過下第八去亦可說為凡聖智境既為聖緣亦名
勝義但不名有今依有无攝攝故尔

成唯識論了義燈卷第一

仁年二年二月廿八日中室南馬道移點畢

僧範禪 壬午年

傳頌後賢備云

六〇起

信

論

義

記

卷上

折本 堅八寸七分 橫四寸六分五厘

六一起

信

論

(一)

粘葉本 堅八寸五分 橫五寸二分

想信論義記卷上

京兆府魏國西寺沙門釋 法藏 撰

夫真心寡廓絕言像於筌蹄沖漠希夷亡境智於能

所非生非滅四相之所不遷無去無來三際莫之能

易但以無任為性隨派分岐逐迷悟而昇沉在因緣

而起滅雖復繁興鼓躍未始動於心源靜謐虛凝未

嘗乖於業果故使不變性而緣起深淨恒殊不捨緣

而即真九聖致一其猶波無異水之動故即水以譬

於波水無異動之津故即波以明於水是則動靜交

徹直俗雙融生死涅槃夷齊同員但以如來在世根

想信論序 陽洲智愷造

夫想信論者乃是至極大義甚深秘典開示

如理緣起之義其旨深淵而無相其用廣

大寬廓無邊與九聖為依眾法之本以其文

深旨遠信解者至微故於如來滅後五百餘

年諸道亂興邪魔競扇於佛四法嚴謗不行

六二起

信

論

(三)

依此法得成淨信是故眾生應勤修學

諸佛甚深廣大教

我今隨分懇特說

迴此功德如法性

普利一切眾生男

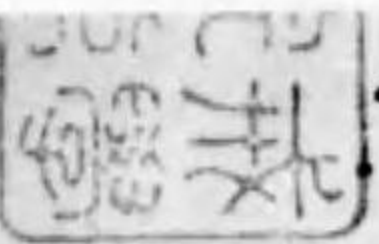
大乘契信論



寬元元年 卯十月終彫印

沙門嚴素

東大寺藏經院小比五聖字



六三 佛說轉女身經

卷子本 整七寸五分

薩及無垢光父母長老阿難時會諸天乾闥
婆阿耨羅人非人等聞佛所說皆大歡喜作
禮奉行

佛說轉女身經

夫轉女身經者大衆之教之真詮女人解脫之
指南也恨矣我國于今未弘蓋尼女尊重之
使之然亦正負大師釋尊之慈下矣蓋結縛
譯之字懷依此且為報聖賢之鴻恩且為濟女
人之重業勸法持寺尼僧并有慈之文報闡
印板真水流通深望尼女競當支持矣
看依此經終十法行當以深誦此文焉出金光
朱願女人愛為男 勇健聰明多智慧
一切常行善報 勤積六度到彼岸
康元九年 兩月十五日 吾自勸學堂抄持謹

折本 豎九寸 橫三寸〇五厘

分為三段此即第三流通分也此文意言此釋迦行
 作意時其餘釋迦宗命應知從摩羅首羅尊者說十世
 累每世如如義說云。藏業者傳說心誦即三賢也
 地藏者十聖之說藏業不重四十八輕也。亦重行
 顯藏者即上三賢十聖所有行顯也因謂三劫果即四
 智佛性常住清淨法界也。自下起結如父可解。

梵網經古跡記卷下

右世末者先師法橋廣重依家貴賤之助成於終嚴
 刻之微功序多珍露點半消爰信重道雖傳正教
 調卷之策舉未嘗修將果淨果之勝業徒耽他請之
 名利更忘自行之善因方拭懺愧之淚專發懇棘之
 願且勸有緣之僧侶且勵無貳之心力開兩朝之印
 板祈懺罪之善採加之戒光高照除第子之疑錯法
 燈久持流現當之普產九般法界巨益盡言及而已

正安四年三月日願主大德所信重

六八同

折本 整九寸二分

橫三寸一分五厘

上

折本 整九寸二分

橫三寸〇五厘

六七 菩薩戒本宗要

已開聖典微密要
 人身聖教難可非
 有心欲出宜及時
 圓鏡懸空照長宵

菩薩戒本宗要一卷

願善寫功 寫法界眾生成就三聚攝共證無上覺
 大保二年秋七月 顛王隱服永寶

已開聖典微密要
 人身聖教難可非
 有心欲出宜及時
 圓鏡懸空照長宵

菩薩戒本宗要一卷

建治元年仲秋之比勸四部眾每獻此摸
 願依於德自奉加知識 至无緣難類同證三德果
 圓鏡懸空照長宵

七 梵網古述記科

折本 整九寸四分五厘

橫三寸三分五厘

六 菩薩戒本宗要

折本 整九寸二分

橫三寸一分

文永壬午年二月二十四日再治畢 西大寺沙門慶雲

比丘巨真壽勸內外之知識施數貫之錢

毋開此印版真流隨近代導利群生矣

建治元年六月日 願以此版奉護記

般若寺勸學所堂位

已開聖典秘密要

圓鏡懸空照長霄

人身聖教難可弄

有心欲出室及暗

菩薩戒本宗要一卷

願次書寫功 与法界衆生 成就三聚戒 共證無上菩提

德治二年七月日 釋迦遺法弟子聖觀智

七二 教 誡 律 儀

折本 竪九寸六分 橫三寸〇五厘

七〇 菩 薩 戒 本 宗 要

折本 竪八寸九分 橫三寸一分

宗美書

迎河州教興寺先住何一律師三十三

年之忌席遺弟必至慧海接錢貨之淨

財開金章之斥救魚整初必之行儀以

貴尊靈之靈位無餘黨河軍法亦普利

吳

文和元年_三十月 日教興寺住持慧海

吾謹戒大宗要二卷

右稱當河州教興寺慧海律師第三_三之忌席

投津敗開鑿板摺屬數部卷教苑群集信集聖

典惠炬增熾然而又罹迷情專靈戒珠亦輕期

而矣法學乃至三有同證者獲矣

正平十四年西月廿九日 小慈寫數空

七三 孟 蘭 盆 禮 文

折本 堅六寸七分五厘

橫三寸七分

七四 律宗新學作持要文

折本

堅六寸九分

橫二寸二分

憐府苦護念通

懺悔已至心歸命頂禮

建治元年七月念開之

鎮倉極樂寺沙門忍性

律宗新學作持要文

中興佛法最祖大悲菩薩撰集詞也

右報闍板眾生之功業圖迷津

出要之巨益焉弟子賢感期行賺

中懷於生靈及戒律弘通於龍華

乃至法界同證佛智而已

應永八年^{辛巳}二月 日

七五 表無表色章科分

折本 堅九寸六分 橫三寸六分

七六 樂師留璃光如來本願經

卷子本 堅八寸六分五厘

上前 月知牌 王馬生得善同捨 上若 聖光

文永四年丁丑月廿日於西太寺拜禮畢 先宗爲禱

心始學之少以孤等粗科分之未及覆以大等寫之

恐有錯亂是以今更勘定之畢

釋法華經卷之四

樂師留璃光如來本願經

康永三年二月 於京師守令集

披撰早世間流布有倦有議託任宗瑪

傳於唐本等身東代於披置也

七通別二受抄

卷字木 堅九寸九分五厘

七道傳緣弘通任直流演橫通如此堅船可得佛法住之
德與律定建勸國家養平之禮斯宗甚大護法不窮濟生
無量戒律之功其事取敵尸羅之力巨益炳著律宗
別傳要略是焉

古之賢近述作此議不知其數無詳

感師卷號二受通別請門文約義豐

如說受戒即入佛位悟道在心帝鑒

斯典但恨之乘流布以來先指刻敕

未令恢弘今弟子賢感關即蒙嚴

律流通上報三寶悲思下濟六趣沉

苦而已

應永三年乙亥九月四日

和州唐提寺住持小蓬莊賢感謹誌

七九 同

折本 竖八寸二分五厘

横二寸六分五厘

卷子本 竖八寸九分五厘

七八 妙法蓮華經 卷第八

妙法蓮華經卷第八

從護持正法 利樂有情願 窮盡未來際 歎甚法華積
廣衆入檀駕 廣流布諸國 乎與法利生 自他兼成佛

弘長三年癸十月日第四度歎之願王心性

妙法蓮華經卷第八

從護持正法 利樂有情願 窮盡未來際 歎甚法華積
廣衆入檀駕 廣流布諸國 乎與法利生 自他兼成佛

文和四年乙未十月日願切發切說

願王重圓

不清淨往至他方道路遇賊死佛言一心生念如
法藏海是人清淨得生天上律子注云此六穢
不可妄用及有僥倖唐為自欺罪不得除要須廣
問明律者能斷之耳

四分律刪繁補闕行事鈔卷下

余於唐武德九年六月內爾時搜揚僧伍無傷俗
譽且閉戶依所學撰次但意在行用直筆書通不
事虬文故言多變陋想有識通士知余記志焉

慶長十二丁曆五月七日

大和州添上郡於冠興寺極樂律院

八、律宗作持羯磨

折本 豎五寸八分 橫二寸九分

列次取捨用不悉期復學矣

建長三年六月九月十七日草畢

同六月切句加點畢

願以此功德 律法久住世

僧寶永不端 利益群生類

敬尊

律宗作持羯磨

南京西大寺故空公律德一百餘

西和五率西曆三月一日寫

右奉為尊靈行願圓滿垂露點

開施文思筆前善種兼現當

所願真俗共成乃至法界普塔

迴向畢

宗英書

八二 卽身成佛義

枯葉本 堅六寸二分 橫五寸二分

卽身成佛義

問曰諸經論中皆說三劫成佛今建立卽身成佛義有何憑據 答秘密藏中如來如是

說被經說云何 金剛頂經說修此三昧者現證佛菩提此三昧者謂大日尊天云若有一字頂輪王三摩地云若有衆生遇此教晝夜四時精進修現世證得歡

卽身成佛義

為報祖德敬開印板願依白業普利

蒼生耳千時建長三年九月廿一日

東大寺戒壇院比丘聖尊謹題

乘義私記卷第三

釋真興集

問章云第八二乘於佛得同自體意樂同名菩薩得受
記別故云云意何答是釋第八因也問此第八因意何
答此因中更有二種一為舍利弗等授佛記別令得我
等與佛平等無二之意樂二法華會上亦有與舍利弗
等同名菩薩聞舍利弗等受成佛記令彼同名菩薩得
我得成佛記之意樂也 問章云謂於此會佛與二乘
受佛記別為令攝得如是意樂我等與佛平等無二云
云意何答是釋此因中第一意樂也攝論云世尊法華
會上與諸聲聞舍利子等受佛記別為令攝得如是意
樂我等與佛平等無二云云意云佛首唯記菩薩當作

八四妙法蓮華經 卷第八

折本 堅八寸八分 橫三寸二分

經時普賢菩薩諸善利那等諸聲聞及諸
天龍人非人等一切大會皆大歡喜愛持佛
語作禮而去

妙法蓮華經卷第八

發護持正法利學有情願窮盡未來際皈皈奉持
庶衆人擅尊廣流布諸國永興法利生自他共成佛

多武舉縮蓋寺法華經板木也

永正十六年^{己卯}九月日

願主柴宗
彫手感誌

天正三年^{甲辰}七月五日
王妙育院^石刻

佛經藏板
卷八
三十一
八四

八五 大乘玄論 卷第二

粘葉本 整八寸三分 橫五寸二分

大乘玄論卷第二
問既有不有亦多種勢者有不有亦多種勢不答亦
得假有還結有不有也又假有不有未理結體也餘
例可尋也

大乘玄論卷第二
胡吉藏撰
第一辯大意 第二明三種中道 第三論智慧中道
第四雜問 第五論量釋諸句 第六明不有有
第一辯大意者不有蓋是諸佛之心眾聖之行
廣也故垂嚴經去文殊法常令一切無畏入一道出
生死更無異趣也即是論初不故賢實眾經橫通

阿耨多羅三藐三菩提心者於一切法應如是
 知如是見如是信解不生法相須菩提評言法
 相者如來說即非法相是名法相
 須菩提若有人以滿無量阿僧祇世界七寶持
 用布施若有善男子善女人發菩提心者持於
 此經乃至四句偈等受持讀誦為人演說其
 福德彼云何為人演說不取於相如不動何
 以故

一切有為法 如夢幻泡影 如露亦如電 應作如是觀
 佛說是經已長老須菩提及諸比丘比丘尼優
 婆塞優婆夷一切世間天人阿羅漢_維雜聞佛所說
 皆大歡喜信受奉行

金剛般若波羅蜜經

真言

鄒 漢 帝 跋 帝 鉢 羅 若
 伊 哩 帝 伊 失 哩 忒 嚧 默 毗 舍 耶 毗 舍 耶
 娑 婆 訶

咸通九年四月十五日王玠為
 二親敬造普施

佛本行集經卷第十九
榮 令

三藏法師闍那崛多譯

車匿等還品中

今時摩訶波闍波提及瞿多彌既見
太子驕囊明珠傘蓋橫刀并廢
莊嚴纒拂自餘瓔珞軋沙馬王及車
匿等如是見已心大驚怖各舉兩手
捉拍身體憂愁而問於車匿言今我
所愛子悉達多留在何處汝自迴還
車匿報言國大皇后悉達太子棄捨
五欲為求道故出家入山遠離親族
剃髮染衣思惟苦行是時摩訶波闍
波提聞於車匿如是語已譬如犍牛
失其犢子悲泣號哭不能自勝其摩

八七 佛本行集經 第十九
折本 縱九寸三分 橫三寸四分 (一)

水牛頭栴檀用塗其身種種瓔珞所
莊嚴身末香熏香燒香所熏柔軟之
體今忽不見嗚呼我子愛戀之心徹
我皮肉筋脉骨髓而在中住今忽捨
出入山林間

佛本行集經卷第十九 集于三張 合字

佛本行集經卷第十九

大宋開寶七年甲戌歲春
勅雕造 孫清

熙寧辛亥歲仲秋十一日 中書省奉
聖旨賜大藏經板於闕聖寺聖新印所造
提轉管勾印經院事智居大師易宗 康謹

大唐西域記卷第十七國

三藏法師玄奘奉 詔譯
大慈持寺沙門辯機撰

伊爛拏鉢伐多國 瞻波國

羯朱唱祇羅國 奔那伐彈那國

迦摩縷波國 三摩旦吒國

駛摩栗底國 羯羅拏蘇伐賴那國

烏荼國 恭御陀國 羯饒力乾加國

憍薩羅國 案達羅國

馱那羯磔迦國 珠利耶國

達羅毗荼國 秣羅矩吒國

伊爛拏鉢伐多國 周三千餘里國大

都城北臨苑伽河周二十餘里稼穡

滋植花菓具繁氣序和暢風俗淳質

八九 大唐西域記 卷第十
折本 堅九寸二分 橫三寸三分 (一)

險巖谷敬傾山頂有池其水澄鑄流
出大河周流繞山二十市入南海池
側有石天宮觀自在菩薩往來遊舍
其有願見菩薩者不願身命厲水登
山忘其艱險能達之者蓋亦寡矣而
山下居人祈心請見或作自在天形
或為塗灰外道慰喻其人果遂其願
從此山東北海畔有城是往南海僧
伽羅國路聞諸土俗曰從此入海東
南可三千餘里至僧伽羅國

唐言執
師子非

之境

大唐西域記卷第十

奉渡

般若心經疏 并序

日本國僧重源

孤山沙門釋智圓述

夫至道無名非名無以詮其道真空無說非說無以識其空繇是名於無名說於無說既機分利鈍之別故教有詳略之殊辭諸各結筌蹄意在同獲魚兔若乃了說無說達名無名則二十萬頌之非多一十四行之非少然則圓音既演雅詰爰陳相彼此之異宜實本末而相攝彼則毛目委示此則綱領惣陳是故廣之不為煩略之不為寡二涂相埒一味同

言等者此彼法身等故何故不但說無等耶
示現等正覺故能除下二惣歎能除一切苦
即二死苦除真實不虛即三德理顯故說下
二祕密般若分二一牒前起後二正說呪詞
夫諸佛密語非因位所解縱譯梵成華人亦
不曉故凡當密語例皆不翻深求其致只是
密說前般若無所得心耳其猶世人典語召
物庸俗莫得而知物豈異哉或作強釋翻言
解義者恐違祕密之說今無取焉

九三般若心經詒謀鈔

折本

豎一尺〇五分

橫三寸三分五厘

(一)

奉渡

般若心經疏詒謀鈔

有序

日本國僧重源

序曰此經理幽辭要中庸子嘗以三觀義疏之愚恐後昆感疏之之言於是作鈔以翼之號詒謀焉

釋疏為二初題目二初標摠題標題尚簡止取四字為疏別目疏者疏通經義也并序者顯疏中有序也二顯述者孤山所居之處也在錢唐上湖之西北孤絕峙於水中而不與眾山連接世謂之孤山也沙門釋者沙門云息慮號也釋者具云釋迦此翻能仁姓也外道有號沙門者稱釋以簡之釋種有不出家者稱沙門以簡之兼稱之旨也又此方古者皆隨師姓如支遁本姓關既從支法領出家因姓支也道安嘗謂既皆依佛出家宜同佛姓自是沙門皆稱釋氏及阿含經後至果有四河入海無復本名四姓出家同稱釋氏之說故知道安深識冥符聖典智圓名也字無外不知何許人既養疾孤山遂以孤山標其所住姓徐

破惑惡更無過故入理者以真空智證無等理即第一義也無
等之理生佛互等名無等等彼此法身等故者佛果三身互
相齊等也故華嚴云一身一智慧力無畏亦然何故下問也示
現下答也明諸佛道齊故須云等密說至心耳者但言密說
無所得心其義已足似長前般若三字若令文顯著有亦無妨
典語至而知者庸常也如大武柔毛以召牛羊清滌清酌以
召水酒常俗不解則是秘密但呼召不同而牛羊酒水其實無
異譬喻得解智者思之今無取焉者無不也防人強釋故此遮
之或別所屏庶贊述功益乎自他同至于道

般若心經疏詒謀鈔

三平七年三月廿江州下向時

感得之

未此字賢寶

終

